

## 長野大学での講演と「心の病」の表現について

平成 27 年 11 月 24 日、長野大学社会福祉学部で「精神保健福祉演習実習指導」で講師を務めました。精神保健福祉士と社会福祉士の取得を目指していて、既に実習をされたり、当事者支援をされたり、実生活でも実践を行っている三年生の皆さんが聴講されました。

私の体験談では、発病と入院生活での体験、長野で地域の人たちと出会ったことで、回復してきたこととお話しました。精神科病院に何年も住み続ける治療もしていない人たちがいて、所謂「社会的入院」をあれている人たちと話したことが今の精神科病棟問題の運動の原点である経験についてもお話しました。

「一生ここで暮らしていく」という言葉がとても衝撃的でした。

当事者会活動を始めたきっかけも、同じ職場で働く仲間やボランティアさん、スタッフの皆さんと共に過ごしたことから、お互いに病気や障がいによる生活のしづらさを飾らずに語り合えるのが嬉しく思っていました。今から 13 年前の作業所の忘年会では「精神障がい者には医療も必要だけれど、人の支えがあってその優しさで自分らしさを取り戻して元気になりました」という感謝の気持ちを述べました。現在はピアスタッフとして働いていますが、当事者会活動に、自分なりに貢献できることを精一杯努めること、人と真摯に向き合うこと、研鑽を積むこと、自身の体調の管理や人とのネットワーク、信頼関係を築くこと等、心がけていることや逆に躓きや失敗、困難なこともお話ししました。

当事者としての共感が大切です。

また「自分がどこまで責任をもてるのか、もとうとするのか」と考えていることも述べました。

学生さんたちも、友人との関係でも、距離感の取り方が近すぎたり、逆に遠すぎてしまったり悩んでいるという感想がありました。

体験発表の後に、NPO 法人ポプラの会、地域活動支援センター・ポプラ、長野県ピアサポートネットワークの活動についてもパワーポイントを使用して、活動を発表しました。

今、精神障がい者の支援を学んでいる学生さんたちに理解して頂きたいことをお願いしました。

それは「心の病」という表現を使わないで頂きたいということです。

一見、配慮されている、ほんわかと包んでいるような表現です。

ですが、障がいや精神疾患があっても私たちの「心の全てが病ではない」と思うのです。

私たちには「健全な感情」もあれば「健全な意志」や「健全な希望」もあります。

人を思いやれる気持ちもあります。

後日、大学の実習室から送られてきた学生さんたちのアンケートにも「心の病」という表現について「使われる当事者の気持ちになれば理解できる」という応えを頂きました。

私の友人も「一見耳に心地良いことばに聞こえるけれど、よく考えれば表現としておかしい」と気付いたと言ってくれました。使われる当事者でなければ気付きにくいのかもかもしれません。

(これはポプラの会としての見解ではなく、私の個人的な見解ですのでご了承ください)

でも、いつか「障害」という標記が「障がい」となったように議論になればと願っています。

今回の長野大学での発表は、「日常生活でも人と誠実に向き合っていこう」という学生さんたちの真剣なまなざしと高い志に襟を正した出会いとなりました。

勇気と励みと心強い頼もしさを感じました。心より感謝しています。

ポプラの活動、利用者さんの様子やスタッフとの交流を希望されているそうなので、その実現を願っています。私ももっと学んでいこうと思います。

大堀 尚美